31 テーマ別 日本文化と生き方

出題傾向
- 説明的文章の問題では、日本の伝統文化や言語についての考察、偉人の思想を踏まえた人生論などが頻繁に登場する。
- 日本人の特性や、人としての生き方について、筆者の主張を読み取ろう。

標準問題

▲△▲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈岩手改〉

1 青森県十和田市に、奥入瀬渓流という日本国内でも有数の景勝地があります。

2 しかしこの渓流、明治時代に発見されるまでは、地元の人々は別になんとも思っていませんでした。重いものをもってのぼるのがたいへんなので、むしろ嫌がられていたのです。その美しさを発見したのは、文学家としても知られる*大町桂月でした。東京から訪れた彼が、その風景に感銘を受けて「奥入瀬の渓流の幽静、天下無比なること、*二也」と書いてから、多くの人々が足を運ぶようになりました。

3 このように、ある物事の価値がその当事者に理解されていないケースは珍しくありません。とくに日本人は、良くいえば謙虚、悪くいえば自虐的なところがあって、身近なものをみなダメだと考えがちです。いろいろな文化や生活習慣についても、欧米より劣っていると思い込んでいる人が多いのです。

4 日本人自身が欠点だと思い込んでいる物事の中に、実は高い価値を持っているものがあります。その代表格とも呼べる日本の特質について考えてみましょう。

5 日本語の曖昧さです。

6 曖昧なことに価値があるなどというと、驚かれるかもしれません。実際、「日本人は物事をはっきりといわないから欧米人に理解されない」という声をよく聞きます。

7 A 一六世紀にキリスト教を布教するためにやってきたカトリックの宣教師も、言葉の問題でさんざん苦労し、ローマ法王に「日本語は悪魔の言葉である」と報告しました。

8 そんな批判を聞くと、「たしかにそうだ」と納得してしまう人が多いでしょう。B 、欧米とは異なる伝統を持つ他国の言語を悪魔呼ばわりするのは問題です。欧米の言語は論理を重視するかもしれませんが、それが文化的に正しいとはかぎりません。長い歴史をもつ②日本語が曖昧になったのは、それなりの理由があってのことでしょう。

9 曖昧な表現は多くの言葉を費やして細かく述べたりしないので、お互いが「ツー」といえば「カー」と応じられるような洗練された関係がなければ成立しません。いちいち噛んで含めるような言葉にしないと理解できない人間のいる社会では、厳密な論理性が求められます。よそ者とつき合わなければいけない大陸諸国がそうなるのは、自然な成り行きでしょう。

10 それに引きかえ、以心伝心でわかり合える社会では、あまり事細かな表現は嫌われます。わかりきったことを口にするのは相手の理解力を信じていないように思われて失礼になるのです。外からの人の出入りの少ない島国は、そういう関係性が生じやすい社会です。密閉された社会では人々の同質性が高まり、コミュニケーションが洗練されます。多くを語らずに意思の疎通ができるのですから、いちいち事細かく説明する社会よりも高度な言語能力を身につけているといえるのでしょう。

11 俳句のような短詩型を完成させた日本は、こと曖昧に関しては間違いなく最先進国です。曖昧を恥じたりする必要はまったくありません。むしろ胸を張るくらいでちょうどいいでしょう。

12 冒頭で紹介した奥入瀬渓流もそうですが、どうも日本人には自分の国や文化の価値を過小評価する傾向があります。たとえば、日本の浮世絵はかつてフランスで高く評価され、「*ジャポニズム」が生まれるきっかけになりました。

でも、これは日本人自身が紹介した結果ではありませんでした。割れやすい陶器を輸出するのに、浮世絵を単なる「つめもの」として使ったのを、フランス人が「これは何だ?」とびっくりし、陶器よりもつめもののほうに注目したのです。

13 当時の日本は明治維新の後で、日本の文化を価値のないものと考える風潮が広がっていました。だから浮世絵も、紙くず同然に扱われてしまったわけです。一九四五年の敗戦後もそうでしたが、日本は政治体制が大きく変わると、それまでの伝統文化を否定したがるのです。外国の文化にかぶれて、よく考えもせずに自分たちの美点を見失うのは、残念なことだといえるでしょう。

14 これまで日本は、外国の真似(まね)ばかりしてきました。もちろん、外から取り入れるべき文化があったことはたしかです。しかし、日本が長い歴史を持っていることを忘れてはいけません。その長い歴史の中で、日本は世界に誇(ほこ)り得る固有の文化を築いてきました。外国人が理解しないからといって、自分たちでその価値を見下してしまえば、日本はつまらぬ国になってしまいます。③自分たちの美学や価値観を堂々と発信し、外国に認めさせる努力をすべきでしょう。

15 いまは経済活動が国境を越えてグローバル化しつつありますが、そういう時代だからこそ、各国の*ローカルな文化の価値が増すといえるでしょう。世界に見せられる独自の文化のない国は、グローバル化の波にもまれて埋没してしまいます。日本には、曖昧の美学をはじめ、他国には見られない文化がたくさんあります。それを自信をもって発信するには、まず日本人自身がその価値に気づかなければいけません。

〈外山滋比古(とやましげひこ)「考えるとはどういうことか」より〉

(注)　大町桂月＝明治時代から大正時代に活躍した評論家、詩人。
二也＝「(いくつかあるうちの)二つ目」という意味。
ジャポニズム＝一九世紀後半に、日本美術の影響を受けて、西洋で盛んになった美術の傾向。
ローカルな＝地域特有な。

(1)　線①「青森県十和田市に、奥入瀬渓流という日本国内でも有数の景勝地があります。」とありますが、景勝地の「奥入瀬渓流」は、どのようなことの例として取り上げられていますか。「……ことの例。」に続くように、文章中から二十二字で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

［　　］～［　　］ことの例。

(2)　［　　］A・Bに当てはまる言葉を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　なぜなら
ウ　あるいは　　エ　つまり
オ　たとえば

A［　　］
B［　　］

(3)　線②「日本語が曖昧になった」とありますが、その理由についてまとめた次の文の［　　］ⓐ・ⓑに当てはまる言葉を、ⓐは十六字、ⓑは六字で文章中からそれぞれ抜き出しなさい。

・外からの人の出入りの少ない密閉された社会である日本は、人々の同質性が高まり、相手と［　　］ⓐ［　　］ので、大陸諸国のように事細かく表現するための［　　］ⓑ［　　］は重要視されないから。

ⓐ
ⓑ

⬅問題は次ページに続きます。

(4) 文章中の「奥入瀬渓流」や「浮世絵」が価値のあるものと認められるようになった、そのいきさつと同様の例として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校の近くに建っているさびれた古民家が、新聞の特集記事で取り上げられ、それ以来県内でも有数の観光場所となった。

イ 学校の帰り道に見慣れていた寂しい田舎の風景が、その日は見事に夕日に映え、生徒みんなの心に大変美しく感じられた。

ウ 学校の昇降口の壁に掲げられている絵画が、専門家の調べによって、とても有名な画家の作品であったことが確認された。

エ 古木を再利用して立派に新築された校舎が、テレビのニュースで紹介され、それ以後多くの見学者が訪れるようになった。

(5) ――線③「自分たちの美学や価値観を堂々と発信し」とありますが、日本人が「自分たちの美学や価値観」を「堂々と発信」するために必要なのは、どのようなことだと筆者は述べていますか。二十五字以上三十五字以内で書きなさい。

25

(6) 文章中の各段落の役割について説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 3段落は、1段落と2段落で挙げた具体例をまとめ、4段落で提示される筆者の主張の理由を説明する役割をもっている。

イ 8段落から11段落は、5段落から7段落で示した内容と対比しながら、12段落以降に示す筆者の意見を導く役割をもっている。

ウ 13段落は、12段落で示した具体例の理由を挙げて、14段落以降に述べる文章のまとめへとつなげる役割をもっている。

エ 14段落と15段落は、12段落と13段落で提示した内容の全てを否定し、読者に新しい考え方を提案する役割をもっている。

アドバイス

入試問題では、日本に関する話題がよく出題される。なかでも、日本文化や日本語についての文章はきわめて多い。

日本文化では、能・歌舞伎（かぶき）などの芸能、浮世絵などの芸術、建築、生活などの特徴的な性質についてと、それらの根幹にある日本人の思想について論じる文章がよく取り上げられる。

日本語では、ことわざや慣用句、敬語、「ら抜き言葉」といった日本語の特徴にまつわる文章が多い。また、日本人の「コミュニケーション」も頻出のテーマといえる。「和」を尊び、自己主張が少ないといわれる日本人のコミュニケーションについて、筆者がどう考えているかを読み取ろう。

日本に関する文章では、日本固有の言語や文化を、欧米の言語や文化と比較しながら論じ、両者の思想の違いを明らかにしている文章が多い。新しい作品も出題されるが、これまでに入試で取り上げられたことのある作品が再び扱われることもあるので、過去の入試問題を積極的に解いておこう。

発展問題

▲△▲　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈宮崎改〉

1 生きることは学ぶことであり、学ぶことには喜びがある。生きることは、また何かを創造していくことであり、その創造には、学びの段階では味わえない、大きな喜びがある。このことはどんな人の人生にもあてはまるが、特に学問の世界では*銘記すべき事柄であろう。

2 言葉をかえて表現しよう。学問の世界においては学ぶこと、創造することの喜びはとりもなおさず、考えることの喜びだと思う。どんな分野の学問でも何か新しいものを発見し、創っていくことに本来の意義がある。「発見」と「創造」にこそ、意味がある。単なる知識の受け売りは学問とはいえないし評価に値(あたい)することもない。さまざまな知識は考えるための資料であり、読書は考えるためのきっかけを提供してくれるものである。

3 ①そう思えば、知識を集めることも案外楽しいことだし、読書も苦にならない。耳で聴き、体で感じ、目で読んで考える。考えたあとでは聴いたこと読んだことは忘れ去ってもよいわけだ。覚えてなければならない、忘れてはならないと思うと、学問する前に疲れてしまい、②学ぶこと自体が*億劫(おっくう)になってしまう。本来、学問はそんなに難しいことではなく、考えることの好きな人間なら誰でも学問することができるし、その喜びを味わうことができるものである。

4 それにしても、そもそも創造を生み出す力はどこからやってくるのか。創造性の背景にある重要な条件とは何なのか。

5 まず、こんな言葉がある。フランスの有名な数学者ポアンカレがいった、「創造とは、マッシュルームのようなものだ」という言葉である。

6 マッシュルームは、キノコの一種である。キノコというと、日本人の私はすぐに松茸(まつたけ)を連想してしまうのだが、すなわち、その松茸のようなものが創造だ、とポアンカレはいうのだ。

7 松茸は、周知のように、地表下に菌根と呼ばれる根をもっている。この根は、きわめていい条件が与えられると次第(しだい)に円形に広がりながら発達していく。ところが、この好条件がいつまでも続くと、③根だけが発達してキノコをつくらずに、ついには老化して死んでしまうのである。植物に詳しい知人の話によると、実に五百年にわたって根だけが発達し、枯死した松茸があるらしい。

8 ［　　］、どうするか。発達してきた根に、ある時点で、根の成長を妨害する条件が与えられなければならないのである。その妨害条件は、例えば季節の変化による温度の上昇あるいは下降といった外界の条件であったり、また、松やにとか、酸性の物質とかの物質的条件であったりするようだ。このような条件が与えられると、その妨害にもめげずに生きるために、根は胞子という形で種子をつくって発達を続けようとする。そうして、やがて松茸となるのである。

9 創造とは、その松茸のようなものだ、といったポアンカレの言葉の意味を、私は次のように解釈する。

10 創造には、まず、松茸が地表下で根を広がらせていくような蓄積の段階がなければならない。だが、いつまでも蓄積だけを続けていては、松茸がキノコをつくらずに枯死してしまうように、人は創造することなく、生涯の幕を閉じなければならなくなってしまうのだ。

11 仏教の*「因縁(いんねん)」という言葉を創造性にあてはめて考えてみると、「因」とは、地表下で発達をとげた松茸の根のように、人が親から受け継いだり、周囲の人間から学んだり、あるいは学校で勉強したりしながら自分の中に蓄積していったものではないか、と私は思う。だが、この「因」だけがあれば、創造あるいは飛躍ができるわけではない。「縁」となるものが必要なのである。

12 ある時点で、松茸に与えられる妨害条件に相当するものが、人がものを創造する上でも、必要なのである。蓄積を表出させる条件が要るのである。それが「縁」である。ただし「縁」にも二種類あると仏教では説いている。「順縁」と「逆縁」である。実生活では、しばしば、「逆縁」が表出エネルギーとなるということである。

13 「逆縁」という言葉を一般的な言葉に置きかえると、「逆境」という言葉にあてはまるのではないだろうか。

14 世の中で成功した人は、大抵、逆境を自分の人生にプラスに取り込んでいく能力をそなえているように私には見える。創造にも、この逆境が深く関係している、といわなければならない。

〈広中平祐（ひろなかへいすけ）「学問の発見」より〉

※一部省略等があります。

（注）銘記＝深く心に刻みつけて忘れないこと。
億劫＝面倒くさくて気が進まないこと。
因縁＝物事は全て、その直接の力である「因」と、それを助ける間接の条件である「縁」によって定められているという考え方。

(1) この文章を二つに分けるとすると、後半はどこからですか。後半の初めの段落の番号を書きなさい。

□

(2) ―線①「そう思えば」とありますが、「そう」が指し示している内容の説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学問の世界では、発見と創造をするために、知識を集めたり、読書をしたりすることが、考えること以上に大切である。

イ 学問の世界では、知識の収集や読書は、考えるためにするものであり、考えることの喜びが、発見と創造の喜びにつながる。

ウ 学問の世界では、知識を集めたり、読書をしたりすることは発見と創造のきっかけにすぎず、すぐに忘れてもかまわない。

エ 学問の世界では、知識の受け売りは評価されず、発見と創造につながらない知識の収集や読書は、無理に行わなくてもよい。

□

55

(3) ―線②「学ぶこと自体が億劫になってしまう」とありますが、それはなぜですか。次の文の□A・Bに当てはまる言葉を、Aは文章中から十五字で抜き出し、Bは文章中の言葉を使って十五字以上二十字以内で書きなさい。

▪考えるための材料として□A□得たことを、□B□と思って、学ぶ前に疲れてしまうから。

A

B

15

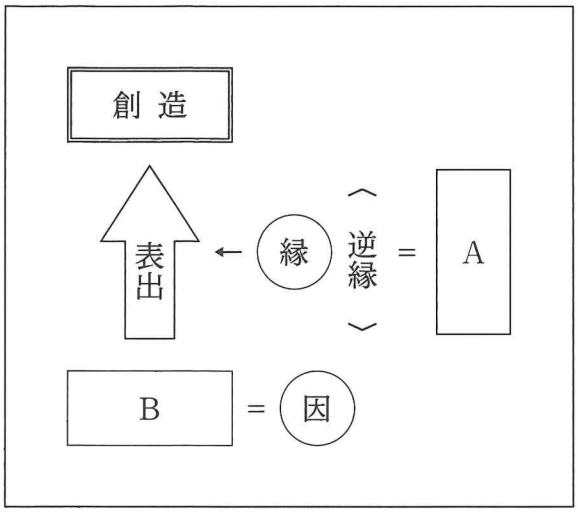
(4) ―線③「根だけが発達してキノコをつくらずに、ついには老化して死んでしまう」とありますが、これを人に置き換えると、どのようになることだと筆者は述べていますか。四十字以内で書きなさい。

(5) □に当てはまる言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　では
イ　ところが
ウ　あるいは
エ　さらに

□

(6) 文章中で説明されている「因」と「縁」の関係について、次のように図にまとめました。□A・Bに当てはまる言葉を、Aは四字、Bは二字で、11・12段落からそれぞれ抜き出しなさい。



A
□
□
□
□

B
□
□

(7) この文章の内容と合っているものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　学んだ知識を生かし、発見と創造につなげるためには、多くの人の協力を得ながら、逆境を克服していくことが必要である。
イ　現在の恵まれた環境に満足せず、あえて逆境を求めて学び続けることにより、新たな発見と創造を生み出すことができる。
ウ　発見と創造こそが学問の本来の意義であり、人が何かを創造するときには、その条件として逆境を必要とすることが多い。
エ　多くの知識を集め、読書に励むことで、発見と創造の喜びが味わえ、逆境を自分の人生に生かすことができるようになる。

□

アドバイス

生き方・哲学・思想に関する分野では、ここで取り上げたように、生きるために必要なことを、西洋や東洋の有名な哲学者や思想家の考え方と関係づけて述べる文章が扱われやすい（あくまでその哲学者や思想家が述べた内容が重要なので、人物自体を知らなくても気にしなくてよい）。また、読書の果たす役割、創造性を生むための背景、逆境への対し方、生きていくときの支えとなる生きがいや希望などがテーマとなった文章も多い。

何のために生きるのか、どのように生きていけばいいか、という命題に明確な答えはない。筆者は、偉人の言葉や、自分の見聞したものを通して考え、持論を述べているのである。筆者がどのように考えているのかを読み取ろう。筆者の結論は文章の冒頭や最後（あるいは両方）にあることが多い。